

いふものは是也、鍾を猪口といふは、即今福建及朝鮮の方音也とぞ、佛經に鍾をまゆくとよめり、さればまゆく音轉じて、ちよくとなれるなるべしといへり、黄鍾をわうしきとよみ、萬葉集にまくれを鍾禮と書るも皆古音なり、薩摩にてのぞきといへり、

〔料理通^{四編}〕普茶卓子略式心得

一 席中 都て雅言を用ゆ、^{○中} 盃猪口を十景套盃^{じっけんばい}また石^{いし}ともいふ、

〔天保度御改正諸事留^四〕天保十三寅年十一月二十一日^{○中}

一 盃猪口等^江 金銀を焼付、手を込候繪柄、^井 高價之品、樂焼等商候者、

右者密々入念取調、早々御申聞可被成候、尤組合内ニ無之候共、及見候ハ、是又御申聞可被成候事、

十一月二十一日

〔寛天見聞記〕予幼少の頃は、酒の器は、鐵銚子塗盃に限りたる様なりしを、いつの頃よりか銚子は染付の陶器と成り、盃は猪口と變じ、酒は土器でなければ吞めぬなど、^{○下}

〔守貞漫稿^{後集一}〕酒類

盃モ近年ハ漆盃ヲ用フコト稀ニテ、磁器ヲ専用トス、京坂モ爛德利ハ未ダ専用セザレドモ、磁杯ハ専ラ行ハル、也、磁杯三都トモニチヨクト云、猪口也、三都トモ式正塗杯、略ニハ猪口、式正ニモ初塗杯、後猪口ヲ用フコト銚子ニ准ズ、^{○中}

近製猪口^{○圖} 薄キコト紙ノ如ク、口徑二寸許、深サ八分バカリ也、大小アリ、尾張ニテ専ラ焼之、昔

ハ陶器磁器トモ、始メ紋模様等ヲ描キ彩リ、後白玉粉ト云ヲ掛テ焼成ル也、然ルニ文政比ヨリ、此猪口ヲ白ノマ、白玉ヲカケ焼テ、無文ナルヲ太白ト云、是ニ江戸大坂等ニテ、藍及ビ諸彩金銀泥ヲ以テ、種々密畫ヲカキ、其彩品ニ白玉粉等ヲ加ヘタル故ニ、再竈ニ焼テ屬之也、號テキンガキト